

## S. Anderson の reality と imagination の世界

小園敏幸

シャーウッド・アンダスン (1876—1941) は従来のアメリカ小説に根を張っていたお上品な伝統<sup>(1)</sup>から完全に脱皮した最初の作家である。

彼の素材は、人間を規格化する機械文明の社会に即応出来ずに孤独と欲求不満に喘ぎながら、それでも尚、人間性の回復を求めて精一杯に生きようとしている素朴な人々に向けられている。アンダスンは彼らや彼らの生活を単に新聞記者的に外面描写するのではなくて、その内面を捉えて、所謂当時流行をきわめたフロイド理論の援用 (実際には、アンダスンはフロイドを読んだことはなかった<sup>(2)</sup>) により、人間の無意識的抑圧から生じる心の歪みや願望の追求を心理描写している。

更に、彼は Trugenev や Tolstoy や Chekhov や Dostoevsky の影響を受けており<sup>(3)</sup>、例えば、友人の Paul Rosenfeld は *Winesburg, Ohio* (1919) を読んで彼を “The Phallic Chekhov”<sup>(4)</sup> と評した。そして、*Winesburg, Ohio* や *Dark Laughter* (1925) に於ける sex の描写については D.H. Lawrence (1885—1930) と精神分析学者達の影響も見られる。また、アンダスンは、William James (1842—1910) の造語にかかる心理学的用語の stream of consciousness<sup>(5)</sup> に着目して書かれた James Joyce (1882—1941) の *Ulysses* (1922) を賛美し、その手法を作品に取り入れた<sup>(6)</sup>。更に、アンダスンの文体に大きな影響を与えたのは第一次大戦後の作家達を “Lost Generation” と名づけたガートルード・スタイン (Gertrude Stein, 1874—1946) である<sup>(7)</sup>。彼女の作品の特徴は存在の流動性と時間の瞬間性に着目して、それを文体に移そうとした点である。彼女は一般的に既定されたシンタクスを無視し、プロットを排斥して、美しい音を持つ語句の詩的繰返しによって

音楽的リズムを持つ文章を創造したのである。アンダソンは彼女の短編集 *Three Lives* (1909) や詩集 *Tender Buttons* (1914) を読み、言葉の美しさに魅せられ積極的に彼女の文体を吸収したのである。

文体的な面で、アンダソンが多くの作家達から影響を受けたことについて、これまで見てきたが、次にプロットについて考察したい。

小説とは本来フィクションでなければならない。

しかし、フィクションは creative imagination から生まれたもので、外郭は虚構性を帯びているが、その根底は人生体験に根ざしている。故に、作家は経験と観察とイマジネーションの三つを必要とすることは、william Faulkner<sup>(6)</sup> を引き合いに出すまでもなく自明の理である。

アンダソンは、父親に対する情動の両価性と、貧困のなかで一家の支柱となって不幸な生涯を終えた母親に対する憐みを、そして主として自己の経験を既述の素材の核としている。

自己の経験とは大別して次の四項目になる。

- (1) クライド (Clyde) で貧困の体験をする。
- (2) Anderson Manufacturing Company を創立し、その社長となる。
- (3) 会社を整理し、コーネリア (Cornelia) と離婚する。
- (4) 真理の追求をする。

上記の四項目について、個々に具体的に少し見ることにする。

(1) 貧困の体験であるが、父親に甲斐性がないために、アンダソンは少年期に様々なアルバイトをして家計を助けている。因に、1919年5月31日付の『シカゴ・トリビューン』紙 (*Chicago Tribune*) の “Who’s Who” の中で、アンダソンは幼い頃の自叙伝的スケッチとして次の様に述べている。

Lord, but we were poor...too poor.

.....  
As early as I can remember, I was on the streets of our town, sweeping out stores, mowing the lawns before houses, selling newspapers, taking care of horses belonging to families where there were no men, selling popcorn and peanuts to the crowds on Staurday afternoon...perpetually

---

busy.

その他のアルバイトとしては、water boy, cow-driver, groom, delivery boy, errand boy, corn-cutter, printer's devil, painter, 診療所の掃除, キャベツ畑の野良仕事, 自転車工場の労働等をしていた。

(2) アンドラスンは1904年5月16日にコーネリア・レイン (Cornelia Lane) と結婚し、3年後の1907年に会社を創立し社長となり、地位と富を獲得する。

(3) アンドラスンはアメリカの物質主義の好況時代の波にのって、実業家として一簾の成功をおさめながら、徐々に神経衰弱 (neurasthenia) になり、1912年11月下旬に会社から姿を消してしまう。数日後、約40マイル離れたクリーヴランド (Cleveland) に現われるが、一時的に健忘症にかかっており、病院に収容される。退院後、彼は会社を整理しコーネリアとも離婚する。

(4) 地位と富を捨て、妻子とも別れて彼は真理の追求の旅に出る。即ち、アンドラスンにとって、真理の追求の旅は作家への転身を意味する。

こうしたアンドラスン自身の体験が彼の小説の主人公に踏襲され、既述の四項目のすべて、あるいはその一部が作品を構成している。因みに、具体的にどのように構成されているか、五編の小説に照射してみよう。

*Windy McPherson's Son*: ウインディー・マクファーソンは甲斐性のないのらくら者であったが、その息子、サムは少年期には既に事業家としての才覚があった。サムは新聞の売子をしていたが母親の死後シカゴに出て、またたく間に立身出世をして会社の社長の娘と結婚をした。サムは事業に生きがいを見出そうとするが、やがて彼は自己の空虚を感じた。そして地位と富を捨て、妻を捨てて、どこで何をする当てもなく、truth を求めて旅に出た。これは Book II までのアウトラインである。

*Windy McPherson's Son* について、*Bookman* 45号 (1917年5月) の307ページに、執筆者不明ではあるが“Chronicle and Comment”という見出しで言及している。これによると *Windy McPherson's Son* の初めの部分

はアンドラスン自身の人生体験に基づいた自叙伝的作品である、と指摘している。

*Winesburg, Ohio*: 25のエピソードから成立しているが、エピソード全体はジョージ・ウィラードを中心に展開されている。ジョージの母親は彼の父親をまるで物質文明や出世主義の化身のように見ており、この物質文明や出世主義こそ人間を規格化し、非人情的な人間をつくるのだと考え、ジョージにだけはその様な人生を歩ませたくないと思っていた。ジョージは新聞社に勤めているが、母親の死を機会にワインズバーグを離れる決心を固めた。4月のある朝、ジョージは父親に見送られて汽車でワインズバーグの町を去って行った。

*Poor White*: ヒュー・マクヴェイの父親は皮革製造所で働いていたが、その会社が倒産し、妻に死なれてから、酒ばかり飲んでた。そのためヒューは学校にも行けなかった。父親の死後、ヒューはミシシッピー川を後にイリノイ州、インディアナ州、オハイオ州と小さな町を転々とした。時代の波に乗って、ヒューは農業機械を発明し、町一番の金持の娘と結婚した。やがて、ヒューの心の中にはっきりしない葛藤が芽生えた。そして彼は旅行をし、その旅先で拾った小石に心を奪われた。その小石の素晴らしさについては *A Story Teller's Story* の中で次の様に述べている。

Once, in one of my novels, "Poor White," I made my hero at the very end of the book go on a trip alone. He was feeling the futility of his own life pretty fully, as I myself have so often done, and so after his business was attended to he went to walk on a beach. That was in the town of Sandusky, in the state of Ohio, my own state.

He gathered up a little handful of shining stones like a child, and later carried them about with him. They were a comfort to him. Life, his own efforts at life, had seemed so futile and ineffectual but the little stones were something glistening and clear. To the child man, the American who was hero of my book and, I thought, to myself and to many other American men I had seen, they were something a little permanent. They

---

were beautiful and strange at the moment and would be still beautiful and strange after a week, a month, a year.

I had ended my novel on that note and a good many of my friends had told me they did not know what I was talking about. Was it because, to most Americans, the desire for something, for even little colored stones to hold in the hand now and then, to glisten and shine outside the muddle of life, was it because to most Americans that desire had not become as yet conscious?

Perhaps it had not but that was not my story. At least in me it had become conscious, if not as yet well directed or very intelligent. It had made me a restless man all my life, had set me wandering from place to place, had driven me from the towns to the cities and from one city to another.

In the end I had become a teller of tales. I liked my job. Sometimes I did it fairly well and sometimes I blundered horribly. I had found out that trying to do my job was fun and that doing it well and finely was a task for the most part beyond me.<sup>(9)</sup>

*Many Marriages:* 主人公ジョン・ウェブスターは父の後を継いで洗濯機製造業者になったが、文学好きの作家志望であった。37, 8歳のある秋の日に、彼の心に今迄抑えつけられていたものが頭をもたげ始め、人生の本質を求め始めた。ついに妻と娘を捨てて、秘書のナタリーと一緒に静まりかえった夜明け前の町を歩いて駅に向かった。この作品にも *Poor White* と同様に小石を捨てる場面がある。ジョンはその石を娘と別れる時に手渡すことになるのだが、その石の輝きこそ生を象徴しているのだと思いい“the jewel of life” と名づけた。

*Dark Laughter:* 主人公ブルース・ダドリーはシカゴで新聞社に勤めていたが、彼の妻は小説家であった。彼は妻に連れられて芸術家を志す者たちのパーティーに顔を出すが、そういう連中とはなじめず、妻にだまってひとりでシカゴから姿を消してしまった。インディアナ州のオールド・ハーバーに来て、自動車車輪工場の車輪塗装職人になってシカゴでの生活を

思い出すのであった。

*Dark Laughter* について、William R. Langfield は “Sherwood Anderson Pursues Elusive Emotions” というタイトルで *Literary Digest International Book Review* の第3巻（1925年11月）の805～808ページに書評を発表している。それによると、ロマンティック・リアリストとして、アンダソンは *Dark Laughter* で神話的象徴的人物を創造し、彼自身の思想、希望、束縛からの解放、とりわけ sex について語っている、とある。

以上五編の小説を見てきたが、結局、多少事実の歪曲はあるにしても、彼の人生を再現したものである、と言えよう。

Irving Howe は一般に自叙伝と言われている三編 *A Story Teller's Story*, *Tar: A Midwest Childhood*, *Sherwood Anderson's Memoirs* について、その著 *Sherwood Anderson: A Biographical and Critical Study* の中で次の様に語っている。

From Anderson's autobiographical volumes it is possible to extract almost everything but reliable information. As he himself blithely warned his readers, he made no effort to be accurate: he was recording the legend of his life rather than its mere events. That he justified this procedure by a dubious theory of art is, for the moment, irrelevant. What is important that he felt some deep need to construct an elaborate public legend about his family and his boyhood self.<sup>(10)</sup>

たしかに、Howe の指摘している様に、アンダソンの自叙伝には可成の虚構が含まれている。アンダソン自身も *Tar: A Midwest Childhood* で次の様に述べている。

I have a confession to make. I am a story teller starting to tell a story and cannot be expected to tell the truth. Truth is impossible to me.<sup>(11)</sup>

更に、*Sherwood Anderson's Memoirs* では次の様に述べている。

---

It is difficult, impossible to write of any life without lies. Men do not live in facts. They live in dreams.<sup>(12)</sup>

例えば、父親の母親に対する態度を見ると *A Story Teller's Story* では常に誠実である様に描写されているが、事実は *Tar: A Midwest Childhood* の 272頁から275頁にわたって描写されている様に、不誠実だったのである。即ち、アンダスンの作品の場合、自叙伝に限らず全著作に world of reality と world of imagination が混在しているのである。

world of reality と world of imagination の関係を “Man and His Imagination” の中でアンダスンは次の様に述べている。

Now there are two distinct channels in every man's life. We all live on two planes. There is what we call the world of reality and there is the somewhat unreal world of imagination. These roads do not cross each other but the road of the imagination constantly touches the road of reality. It comes near and goes away. All of us are sometimes on one road and sometimes on another. I think that we are all living more of our lives on the road of the imagination, or perhaps I had better say in the world of the imagination, than in the real world.<sup>(13)</sup>

彼は更に論を進めて次の様に語っている。

The work of any writer and for that matter of any artist in the *Seven Arts* should contain within it the story of his own life.<sup>(14)</sup>

アンダスンはこの様な考えの基に作品を書いたのである。彼は作品の中で現実の生活のみを単に表面的に描写したり、あるいは、現実の生活から全く離れて想像の世界のみを描写したりはしなかったのである。即ち、彼は現実の世界に基づいて想像の世界を構成して作品を書いたのである。結局、彼は忘却や感傷や羞恥等によって事実を意識的に、あるいは無意識的に多少歪曲して作品を書いたと解釈されうるであろう。

既に見てきた五編の長編小説では、主人公が一度得た地位と富を捨てて、真理の追求の旅に出るが、それは主人公がアンダスンの言うグロテスク<sup>(15)</sup>を超克した結果の勝利の旅立ちであると言えよう。

真理の追求の旅立ちがアンダスン自身の体験によるものであることは既に述べたが、その旅立ちの裏には神経衰弱が存在している。もし神経衰弱になっていなかったなら、アンダスンの真理の追求の旅立ちが果してあったであろうか。あるいは神経衰弱という病名はアンダスンが真理の追求の旅立ちをするための単なる手段であって、実際には神経衰弱を装った仮病であったのであろうか。

この点を明らかにするためにアンダスンの神経衰弱を精神分析的に考察したい。

1912年12月2日、月曜日の『エリリア・イーヴニング・テリグラム』紙 (*Elyria Evening Telegram*) の一頁に (“ELYRIA MAN IS FOUND DAZED IN CLEVELAND” という見出しで、次のように語られている。

Sherwood Anderson, head of the Anderson Manufacturing Co., and well known as “the roof-fix man” was found in Cleveland last night dazed and unable to give his name or address. He was taken to the Huron road hospital, where physicians said he was suffering from nerve exhaustion. His condition is not critical and it is expected that a few days rest will restore his memory.

Mrs. Anderson was notified of her husband’s condition and hurried to the hospital. Friends here say that overwork is the cause of Anderson’s sickness.

Anderson left home Thanksgiving day on a business trip. Since that time nothing has been heard from him until Monday when news of his condition was conveyed to his family and his business associates.

Late Sunday afternoon Anderson went into the drug store of J.H. Robinson, East 152 street and Aspinwall avenue. His clothes were bedraggled and his appearance unkempt. To the questions asked by the clerk in the store, Anderson replied incoherently. A physician and [ a ]



---

police who were notified ordered him conveyed to Huron road hospital.

Added to the cares of the Anderson Manufacturing Co. and other enterprises in which Anderson was the guiding spirit, for the last several months he has been working on a novel and at odd times has been writing short stories for magazines. Engrossed in writing Anderson worked many a night until nearly dawn and then attended to business affairs.

Two months ago he was warned by a physician that he was overworking and should stop writing. A few days later, however, he was back again at work on his book. That he has been keeping steadily at his literary endeavor was known to friends, who only a week ago remarked his fagged out condition.

It is thought overwork caused a mental breakdown when he reached Cleveland last Thursday. Anderson's identity was learned through papers found in his clothes at the hospital.<sup>(16)</sup>

医師の診断によると、アンドアスの病気は「極度の精神的緊張と過労」(“severe mental strain and overwork”)<sup>(17)</sup>が原因である。しかし、「それも次第に快復してくるだろう。アンドアスは四日間の旅浪のことを何も話すことが出来なかった」(“severe mental strain and overwork...will gradually wear off. The patient had not been able to tell anything of his four days of wandering.”)<sup>(18)</sup>と医師は語っている。

アンドアスが神経衰弱になった直接的導火線とは、『エリリア・イーヴニング・テリグラム』紙が述べているように「書くことに夢中になって、アンドアスは毎晩ほとんど夜明けまで勉強をし、それから会社の業務に専心した」ことであることは言うまでもない。しかし、診断から判断すると、この直接的導火線こそ神経衰弱を引き起こした真の原因だと医師団は考えていたようである。実際に、アンドアスに施された治療はあくまでも表面的なものにすぎない。それによって得られるものは一時的な快復であって完全なそれではない。その証拠に、アンドアスは神経衰弱が一応快復し退院した後、1913年2月9日に単身シカゴに出て、その後妻子を呼び寄せた

が、1913年の末頃、再度神経衰弱になったのである。結局、病気の再発を防ぐには真の病根を突き止め、それを絶たねばならないのである。アンダスの神経衰弱の真の病根は、彼の幼児期に求められるべきだったと思われる。所謂、その真の病根を彼の無意識の世界に求めるのである。即ち、アンダスを精神分析することによって、その真の病根を突き止めなければならないのである。

先回の小論に於て、アンダスの生活史をフロイド理論を通して見た結果、そこに「エディプス・コンプレックス」(“Oedipus Complex”)の典型的な実例があることを述べた<sup>(19)</sup>。この結果こそ、今求められなければならない結論なのである。即ち、その真の病根はアンダスのリビドー (libido) がエディプス・コンプレックスの段階に定着していることにある。換言すると、エディプス・コンプレックスに基づく「欲求不満」(frustration) と「葛藤」(conflict) が原因である。

“frustration” の概念はフロイドが不満に終る性的興奮をさして呼んだのに始まるが、次のように定義づけられている。

FRUSTRATION denotes the prevention of, or interference with, the satisfaction of instinctual impulses which lead to the damming up of libido and destrudo. External frustration, caused by external objects, should be differentiated from frustration imposed from within. Both may lead to the improvement of reality testing through increased tolerance of the dammed-up energy. Identification with the frustrating external object may lead to internal frustration by the ego and superego.<sup>(20)</sup>

また、“conflict” は「抗争」とか「相剋」などとも訳されており、次のように定義づけられている。

CONFLICT is considered external if it takes place between one individual and another or between an individual and the external world; it is called internal when it occurs between various conscious or un-

---

conscious tendencies within the individual. Conscious internal conflict takes place between the total personality of the individual and a symptom from which he is suffering; unconscious internal conflict takes place between the id, ego and superego, and leads to an unconscious compromise (neurotic symptom).<sup>(21)</sup>

即ち、一般的には external と internal の場合が考えられるが、アンダスンの場合には internal の方であり intrapsychic conflict (精神内界の葛藤) を意味している。

アンダスンがエリリアをあてもなく出て行ったのは、欲求不満と葛藤のために彼の身心が疲れきった状態に於ける一種の escape と考えることができる。escape には seclusion や escape into reality や escape into fantasy や escape into disease 等があるが、この場合は escape into disease であり、勿論無意識的に行われたのである。

「書くことに夢中になる」ことはアンダスンの意識面では作家になりたためであり、「一生懸命に働く」ことは彼の意識面では家族を養うためである。しかし、これらの理由は rationalization<sup>(22)</sup> に他ならない。彼の無意識面では「書くことに夢中になる」ことも、また「一生懸命に働く」ことも、意識とは別の理由があるのである。この無意識の世界に隠されたものこそ、それらの真の理由であり、アンダスンを神経衰弱に陥らせた真の原因である。

彼の無意識の世界をみてみよう。

アンダスンのリビドーはエディプス・コンプレックスの段階に定着しているために、無意識的に常に彼は妻コーネリア (Cornelia) に母親のイマーゴ (Imago) を求めているのである。彼は自分自身の不完全さは棚に上げておいて、完全な女 (母) の観念をもって結婚生活に臨んでいるので、永久に自分の期待は満たされることはない。その結果、彼はコーネリアに対して満たされないものへの frustration があり、彼はそれを repression<sup>(23)</sup> することによる compensation<sup>(24)</sup> として「書く」ことを選んだのである。も

し「書く」ことを怠れば、アンダスンは何年頃から書くことを始めたのかは、彼が Marietta D. Finley (後の Mrs. E. Vernon Hahn) に宛てた1916年12月8日付の次の書簡から知ることができる。

For nearly seven years now, ever since I began writing... and I count any happiness I have had in life as beginning when I began to scribble...

即ち、アンダスンが書くことを始めたのは1909年である。1909年と言えば、その2年前の1907年に彼はクリーヴランドからエリリアに転居して Anderson Manufacturing Company を創立し、また、1年前即ち1908年にはコーネリアとの間に次男 John (12月31日生) が出生し、彼にとって何かと慌しい時期であったであろう。

アンダスンは子供時代に無意識的に自分を母親と「同一化」(identification) したために、当時世間から“Jobby Anderson”と言われた程に賃仕事に精を出し、それが彼の癖となり、「一生懸命に働く」ことを止めれば、何となく破綻をきたしそうな不安を感じるのである。彼の心に「書く」と「働く」ことのいずれに比重を置くべきかという「葛藤」が生じたのである。しかし、いずれも怠ることも出来ず、ついには身心疲れはてて、放浪という逃避を選んだのである。故に、アンダスンの神経衰弱を完全に快復させるためには彼の無意識の世界にメスを入れねばならなかったのである。

しかしながら、当時のアメリカの精神病理学は無意識の心理学、即ち精神分析学をまだとり入れる段階ではなかったのである。従って、アンダスンの神経衰弱に対する当時の治療が一時的快復にしかならなかったことは止むをえないことだろう。

ところで、1914年以後に於ては、何故アンダスンに神経衰弱の徴候が現われなかったのであろうか。

既に見てきたように、彼の神経衰弱はエディプス・コンプレックスに基づく frustration と conflict が真の原因であったが、1914年には既に Anderson Manufacturing Company の事業を整理していたので、「書く」ことだけに神経を集中させればよかった。更には、*Harper's Magazine* に短編“The Rabbit-Pen”を掲載したために、良い意味で Jobby Anderson を発揮し、一層励みになって「書く」ことに夢中になった。即ち、心の conflict が消えたのである。その上、彼は1914年にコーネリアと別居し、1915年に離婚したために、frustration の消失をみたのである。従って、アンダスンのリビドーはエディプス・コンプレックスに依然として定着してはいるが、神経衰弱を引き起こす材料は消失したのである。

故に、アンダスンの神経衰弱は仮病ではなかったのである。

アンダスンは病院で治療を受けながら自らの将来を熟考して、その結果、もっと人間らしい生き方を求めたにちがいないことは言を俟たないが、真理の追求の旅立ちには神経衰弱になったことが切掛で、消極的ではあってもグロテスクを超克した結果である。もし神経衰弱になっていなかったら、おそらく真理の追求の旅立ちはなかったであろう。また、その場合、実業家から作家への劇的な転身もあり得なかったかもしれないが、アンダスンのリビドーがエディプス・コンプレックスに定義しているのだから、コーネリアとの離婚は遅かれ早かれ現実となっていたであろう。

アンダスンは機械工業以前の牧歌的な社会の復帰を、そして、愛と理解による人間性の回復を、自叙伝的に、作品の中で真剣に訴え続けた作家である。

#### 注

- (1) “tradition of gentility”  
Ray Lewis White (ed.), *The Achievement of Sherwood Anderson* (The University of North Carolina Press, 1966), p.3.
- (2) Sherwood Anderson, *Sherwood Anderson's Memoirs* (Newly edited from the original manuscripts by Ray Lewis White, The University of North

Carolina Press, 1969), p.339.

...Freud had just been discovered and all the young intellectuals were busy analyzing each other and everyone they met. Floyd Dell was hot at it. We had gathered in the evening in one of the rooms. Well, I hadn't read Freud, infact wouldn't read him, and was rather ashamed of my ignorance.

Trigant Burrow, *A Seach for Man's Sanity*. p.561.

It would be easy for the Freudian-minded to see Freud as the inspiration to Anderson's work. But...Sherwood possessed insights into behavior, especially with regard to the sexual determinants of it, which arose from his own independent intuition.

(Interview with Trigant Burrow. Sept. 7, 1962.)

I discussed Freud with him (Sherwood Anderson), and he knew a lot of the answers. At least he hit the high places in Freud.

- (3) *Sherwood Anderson's Memoirs*, p. 451.

...I began to read the Russians, Tolstoy, Chekhov, Dostoevsky, Turgenyev. I think that then, when I came to them, that I did feel a kinship. Is it egotistical of me to say so? I felt a brotherhood with Chekhov and, in particular, with Turgenyev in his *Annals of a Sportman*.

- (4) *Ibid.*, p.451.

- (5) William James, *The Principles of Psychology* (New York, Henry Holt, 1890) I, p.239.

- (6) James Joyce の影響を受けたことについては、George H. Daugherty に宛てた1925年9月15日付の次の書簡に見ることが出来る。

*Letters of Sherwood Anderson*, Selected and edited with an Introduction and Notes by Howard Mumford Jones in Association with Walter B. Rideout. (Boston, Mass.: Little, Brown, 1953), p. 148.

I think as a matter of prose experiment you will sense what Mr. Joyce was driving at when you read *Dark Laughter*.

I very frankly took his experiment as a starting place for the prose rhythm of the book.

- (7) Sherwood Anderson, Preface to Gertrude Stein's *Geography and Plays* (Boston, 1922), p. 5.

My brother had been at some sort of a gathering of literary people on the

---

evening before and someone had read aloud from Miss Stein's new book... he bought *Tender Buttons* and he brought it to me, and we sat for a time reading the strange sentences.

- (8) 1956年にNew York で行われた Faulkner のインタビューが次の書誌に収録されている。  
Jean Stein, "The Art of Fiction XII William Faulkner," *The Paris Review*, 12 (Spring 1956), pp. 28-52.
- (9) Sherwood Anderson, *A Story Teller's Story* (New York: The Viking Press, 1969), pp. 408-409.
- (10) Irving Howe, *Sherwood Anderson: A Biographical and Critical Study* (Stanford, California: Stanford University Press, 1966), p.18.
- (11) Sherwood Anderson, *Tar: A Midwest Childhood* (New York: Boni & Liveright, 1926), p. ix.
- (12) *Sherwood Anderson's Memoirs*, p.26.
- (13) Sherwood Anderson, "Man and His Imagination," in Centeno, Auguste, ed., *The Intent of the Artist* (Princeton N.J. Princeton Univ. Press, 1941), p.44.
- (14) *Ibid.*, p. 58.
- (15) アンダソンは *Winesburg, Ohio* のエピソード全体を集約する序章の役割を果たしている "The Book of the Grotesque" の中で、グロテスクについて語っている。要約すると次の通りである。  
「人間は成長するにつれて、多くの漠然とした思想の集成物としての真理を見つけ出して行く。そして自分に相応しい真理を見出し、それに執着して人生を過そうとした途端に、その人はグロテスクになってしまう」
- (16) 尚、アンダソンが会社を出てエリリアを去って行った時の様子について、Sherwood Anderson は *A Story Teller's Story* (New York: The Viking Press, 1969) pp. 312-313. で次のように述べている。文中の the woman はアンダソンの secretary でオハイオ州レークウッド (Lakewood) に住む Mrs. Leon Howk で、その当時 Miss Frances Shute である。  
Whether at the moment I merely became shrewd and crafty or whether I really became temporarily insane I shall never quite know. What I did was to step very close to the woman and looking directly into her eyes I laughed gayly. Others besides herself would, I knew, hear the words I was now speaking. I looked at my feet. "I have been wading in a long river and my feet are wet," I said. Again I laughed as I walked lightly toward the door and out of a long and tangled phase of my life, out of the

door of buying and selling, out of the door of affairs. "They want me to be a 'nut,' will love to think of me as a 'nut,' and why not? It may just be that's what I am," I thought gayly and at the same time turned and said a final confusing sentence to the woman who now stared at me in speechless amazement. "My feet are cold wet and heavy from long wading in a river. Now I shall go walk on dry land," I said, and as I passed out at the door a delicious thought came. "Oh, you little tricky words, you are my brothers. It is you not myself, have lifted me over this threshold. It is you who have dared give me a hand. For the rest of my life I will be a servant to you," I whispered to myself as I went along a spur of railroad track, over a bridge, out of a town and out of that phase of my life.

更に関連して、*Sherwood Anderson's Memorirs* (New York: Harcourt Brace, 1942, p.194) の中で、アンダソンは鉄道線路沿いを東に向かって、即ち "toward the city of Cleveland" に向かって歩き、"there were five or six dollars in my pocket" ということが記されている。

アンダソンの hallucinatory experience については、"The Man Who Became a Woman," *The Portable Sherwood Anderson* (Penguin Books: Edited, and with an introduction, by Horace Gregory, 1977, p. 373) に次のようにある。

I would listen for a time to their talk and then their voices would seem to go far away. The things I was looking at would go far away too. Perhaps there would be a tree, not more than a hundred yards away, and it would just come out of the ground and float away like a thistle. It would get smaller and smaller, away off there in the sky, and then suddenly—bang, it would be back where it belonged, in the ground, and I would begin having the voices of the men talking again.

- (17) *Cleveland Press*, December 2, 1912, p.2.
- (18) *Ibid.*, December 2, 1912, p.2.
- (19) 『英米文学研究』第17号, 梅光女学院大学英米文学会, 1981, pp.133-151.
- (20) Ludwing Eidelberg (Editor-in-Chief), *Encyclopedia of Psychoanalysis*, Collier-Macmillan Limited, London, 1968, p. 167.

尚、Glover と Freud は各々、次のように述べている。

Glover (1939) noted: "But to grasp the more human aspects of symptomatic regression it is necessary to be familiar with the small child's ideological systems. As has been pointed out the infant has from the the first a reality system appropriate to the conditions of life in which it



---

finds itself, but as development proceeds, and as thought-processes become organized, a distinction can be drawn between ideas that focus round reality experiences of pleasure and pain and phantasies that are developed as a response to complete frustration of instinct. These systems of unconscious phantasy have no doubt a compensatory function to perform although the gratification obtained by this means is at best marginal. Even so it is heavily discounted by the anxieties and, later, guilts to which unconscious phantasies give rise. Phantasy formation is fostered by periodic regressions from waking to sleeping life and by numerous misreadings of waking experience to which the small child is naturally prone. So that whilst there is an *appropriate system of reality thinking for each phase of development*, these systems are increasingly infiltrated or at any rate unconsciously associated with *phantasy systems that are also appropriate to the stage of instinctual frustration at which the child has arrived.*"

Freud (1916–1917) stressed the important role of frustration in symptom formation and noted: "The necessary precondition of the conflict is that these other paths and objects arouse displeasure in one part of the personality, so that a veto is imposed which makes the new method of satisfaction impossible as it stands."

#### REFERENCES

Sigmund Freud, 1916–1917, "Introductory Lectures on Psycho-Analysis." *The Standard Edition of the Complete Works of Sigmund Freud*, J. Strachey (ed.) The Hogarth Press and The Institute of Psychoanalysis, 16: 349–350, 1953.

Edward Glover, *Psycho-Analysis*, Staples Press, London, England, p.31, 1939.

(21) *Ibid.*, p.79.

(22) James P. Chaplin, *Dictionary of Psychology* (New York: Dell Publishing Co., Inc., 1976), p.440.

Rationalization: 1. the process of explaining or interpreting the reasons for a phenomenon. 2. the process of justifying one's conduct by offering plausible or socially acceptable reasons in place of real reasons.

(23) *Ibid.*, p.454.

Repression: the forceful ejection from consciousness of impulses, memories, or experiences that are painful or shameful and generate a high level of anxiety. Repression, according to Freudian psychoanalysis, is a function

of the ego. Impulses arising from the primitive, pleasure-seeking id attempt to gain consciousness so that they may force the ego or rational mind to seek satisfaction for them. The ego, however, dealing as it does with reality and the demands of the superego, attempts to repress such impulses. Repression can also arise through the necessity of ridding the consciousness of extremely painful experiences, such as the memory of a sexual assault. The mechanism is essentially the same, that is, the ego forces the experiences into the unconscious. Any repressed impulse or experience may gain entry to the upper levels of mind in a symbolic form in dreams, errors, slips of the tongue and in the guise of neurotic symptoms. Repression should not be confused with *suppression* or *inhibition*. Both of the latter processes are voluntary. The essential mechanism of repression was held by Freud to be unconscious and involuntary.

(24) *Ibid.*, p.102.

Compensation: the process of engaging in substitutive behavior in order to make up for social or physical frustration or a lack of ability in a certain area of personality. Freud considered *compensation* a mechanism for covering up awareness of an undesirable impulse. Adler considered the process one of reacting to feelings of inferiority; the concept was central to his system of Individual Psychology.

(25) Ludwig Eidelberg, *op. cit.*, p. 37.

Anxiety is the unpleasure experienced when the object is unknown and the anticipation of being overwhelmed by an internal or external force is present. The emotion of anxiety, along with the secretory and motoric discharges connected with it, is an affect experienced by the total personality.

On the basis of his clinical studies, Freud (1895) at first concluded that the libido of the repressed wish changes into anxiety. However, after he introduced the second instinct theory (1920), in which aggression was no longer considered to be a partial sexual drive, he modified his original statement and said that repressed libido may cause anxiety only if its repression has also mobilized aggressive tendencies, which cannot be discharged and then have to be warded off. Consequently, any forbidden wish may produce anxiety. The discovery of the importance of aggression as a decisive factor in the mobilization of anxiety led to the recognition of anxiety as a danger signal. [Freud, 1930]

---

The term *anxiety* is used as a synonym for *fear*, although Freud suggested that fear is the reaction to a known specific danger, while anxiety is the reaction to an unknown one.

Inasmuch as the real source of the danger is unknown to the neurotic, the use of the word *anxiety* may be employed in connection with neurotic fears.

Neurotic anxiety is the result of the individual's inability to differentiate between the wish and the action, when the wish is repressed and is thereby unconscious. Thus, it resembles the feeling of terror more closely than that of normal anxiety. The full discharge of the repressed wish is experienced as taking place in the present instead of in the future. The neurotic reacts *as if* the danger of which he is afraid were actually happening.

Freud (1921) described the panic which takes place whenever a disintegration of the mass has occurred and compared the affect of panic to that of neurotic anxiety. His description, thus, of the mass as "impulsive," "changeable," and "irritable," led by the unconscious, corresponds to the behavior of the neurotic.

Normal anxiety results from an anticipation in which the individual recreates, in his fantasy, a memory that is characteristic of anxiety. He recalls a memory of a previous defeat, utilizing it to experience a dangerous threat to the self. He does not attribute this threat to his own aggression. To protect himself against such an eternal defeat, he mobilizes his aggression and attributes part of it to the dangerous object. Consequently, this dangerous object *attacks* him with his own aggression. As a result, he experiences in his fantasy the threatened defeat, and prepares for flight or fight.